吉田調書全容判明

極限状態だった現場

吉田氏「死んだと思った」

政府の事故調査・検証委員会による吉田昌郎元所長の聴取結果書で、死を覚悟した吉田氏が「思い出したくない」と繰り返し語る場面がある。【1面に本記】

事故発生から4日目の2011年3月14日夜、福島第1原発2号機は危機的な状況を迎えていた。格納容器の圧力が上昇し、消防車による注水ができないまま時間ばかりが過ぎる。

「ここで本当に死んだと思ったんです」。吉田氏の頭には最悪の想定があった。

冷却ができないと、燃料の溶融が進む。溶けた燃料は圧力容器を突き破り、いずれ格納容器も抜けてしまう。「放射性物質が全部外に出て、まき散らしてしまうわけです」

吉田氏は同日夜、まだ免震重要棟に残っていた協力企業の作業員を帰らせる一方、残った東京電力の社員らで注水に挑み続けた。

共同通信の取材では、吉田氏は後に「水を入れ続けるしか方策がない。あとはもう祈るだけだった。『俺と一緒に死ぬのは誰だ』と旧知の部下の顔を思い浮かべていた」と周囲に話していたことが分かっている。

事故収束作業に当たる復旧班の班長として吉田氏の近くにいた男性社員(51)は、吉田氏が「『もう駄目だ』と言ってふらふら歩き回っていたのを覚えています」と証言する。社員にとっても「一番の極限状態だった」という。

15日早朝、2号機圧力抑制室の圧力がゼロになったとの情報が入ると、吉田氏は一部の人員を残し第1原発から社員を退避させ、免震棟には悲壮な決意の約70人が残った。

発電班員として吉田氏とともに残った男性(58)は「相当疲れていたと思いますが、吉田さんはみんながいなくなってからも明るく振る舞っていた。吉田さんが所長でいてくれたので（事故が）これで収まったと私は信じています」と話した。

吉田昌郎元所長の証言のポイント

1号機非常用復水器の動き	(原子炉水位が)あるんじゃないかと思い込みがあって確認しなかった。猛烈に反省している
1号機格納容器ベントの遅れ	弁を手動で開けようとしたが、線量が高くて入れない。大臣命令で開くというものではない。首相の視察で遅れたわけではない
海水注入中止命令	停止は毛頭考えていなかったので、私の判断で継続した
1号機水素爆発	水素が建屋にたまることに思いが至っていない。原子力屋の盲点だった
3号機爆発で不明者多数	四十何人行方不明という話が入ってきて、腹を切ろうと思った
2号機への注水できず	われわれのイメージは東日本壊滅。ここで本当に死んだと思った
退避問題	運転に関わる人間と(注水に関わる)保修の人間を残して退避しろと命令を出した。2F(福島第2原発)まで退避させようとバスを手配した
津波対策	本県沖の波源(はげん)というのは今までもなかった。根拠もないことで対策はできない

福島第1原発事故当初の経過（肩書は当時）

2011年3月11日	14時46分	▶東日本大震災発生。東京電力福島第1原発で運転中の1～3号機が自動停止。外部電源の供給停止
	15時27分	▶津波の第1波が第1原発に到達
	35分	▶津波の第2波が到達。その後1～5号機で全交流電源喪失
	42分	▶東電が国に原子力災害対策特別措置法10条(全電源喪失)通報
	16時45分	▶東電が原災法15条(冷却機能喪失)通報
	19時3分	▶菅直人首相が原子力緊急事態宣言
12日	4時ごろ	▶1号機原子炉に消防車で真水注入
	6時15分	▶菅首相が第1原発視察のためヘリコプターで官邸出発
	50分	▶海江田万里経済産業相が東電に格納容器から蒸気を放出するベント実施を命令
	7時11分	▶菅首相が第1原発到着
	8時4分	▶菅首相が第1原発を出る
	9時4分	▶1号機でベント作業開始
	15時36分	▶1号機で水素爆発
	19時4分	▶1号機原子炉に海水注入開始
13日	9時20分	▶3号機でベント実施
	25分	▶3号機原子炉に注水開始
14日	11時1分	▶3号機で水素爆発
	夜	▶2号機格納容器の圧力が異常上昇。清水正孝社長が第1原発からの退避を電話で政府側に申し出
15日	5時35分ごろ	▶菅首相が東電本店で「撤退はあり得ない」と迫る。政府・東電の統合対策本部設置
	6時14分ごろ	▶2号機圧力抑制室の圧力計の数値がゼロに。4号機で水素爆発。一部人員を残して第2原発への退避決定
	33分	▶吉田昌郎所長がテレビ会議で「必要な人間は班長が指名」と発言。退避始まる

退避に「命令違反」なし

連絡手段なく第2原発へ

東京電力福島第1原発の吉田昌郎元所長＝昨年7月死去＝の聴取結果書（吉田調書）をめぐっては、朝日新聞が今年5月、調書などを基に「所員の9割が吉田氏の待機命令に違反し福島第2原発に撤退した」と報じたことをきっかけに、命令違反があったかどうか論議を呼んでいる。

事故5日目の2011年3月15日午前6時14分ごろ、衝撃音とともに2号機圧力抑制室の圧力計の数値が突然、ゼロになった。この時、第1原発構内には免震重要棟などに約700人の東電社員がいた。

吉田氏は調書の中で「格納容器が破壊された可能性がある。非常事態だと判断した」と述べており、原子炉の監視に必要な当直員や注水作業に携わる人員を残して退避を命じた。当時、免震棟内の緊急時対策本部で総務班長を務めた男性社員(46)は共同通信の取材に、退避前夜の3月14日、2号機の危機的状況を目の当たりにした吉田氏の命令で自分が避難先を探したと明らかにした上で「第2原発に退避することは前夜のうちに決まっていた。吉田所長も理解していた」と話した。

15日早朝の2号機の異常を受け、吉田氏は総務班長に「線量の低い場所を探して退避だ。なければ2F(第2原発)に向かえ」と指示したといい、総務班長が午前6時27分、テレビ会議で所長の指示内容を説明した。

この総務班長の発言をきっかけに退避が始まり、約650人が免震棟を出た。このうち計約250人を乗せたバス5台と乗用車数台は、吉田氏の指示通り、第1原発正門前で一時待機したが、周辺の放射線量が高すぎてとどまれないとの判断で第2原発に向かった。

吉田元所長の

震災発生

〈2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード（M）9・0の東日本大震災が発生した〉

―最初の対応は。

「運転している1、2、3号機について自動停止しているかどうかと、電源関係の異常や設備の損傷がないか確認する」

―津波の危険性は予測していたか。

「NHKだったと思いますけれども、津波警戒警報ですか、注意報が出ているというのは見ています」

―その時点で対策は。

「プラント運転上、津波の対応というのは、この時間で手を打てるものが全くない」

津波襲来

〈第1原発に津波の第1波が到達したのは午後3時27分だった〉

「異常が起こったのは（3時）